

道免き谷津遺跡第3(2)出土木製耳飾りの出土状況

岡田 誠 造

道免き谷津遺跡(第2図)は、千葉県市川市堀之内に所在し、東京外かく環状道路の建設に伴って、平成16年度以降、本格的な調査を継続的に実施している遺跡である。この遺跡は、東京湾に開口する国分谷の一支谷で、北西から南東に開析された幅150m、奥行き1.5kmほどの「道免き谷津」の中にあり、標高8m~3m前後の低湿地遺跡である。このような立地のため、通常では消失してしまう木質の遺物も遺存しており、調査の進展に伴って様々な遺物が検出された。

道免き谷津遺跡第3地点(2)は、国史跡堀之内貝塚の南東に位置する調査区(第3図)で、平成24年度に1,950㎡の本調査を実施した。谷津の開口部から500mほど奥に入った場所にある。堀之内貝塚から続く尾根状の台地の直下であって、貝塚からは直線距離で200mほどの位置にあたる。この尾根状に延びる台地の南斜面は、堀之内貝塚の直下で急峻な崖を形成している。今回の調査範囲内では、標高6mまで比較的緩やかな傾斜と、幅3mほどの平坦面を形成しているが、その南側では急に落ち込む地形となる。

調査区内からは、縄文時代後期を中心とする土器・石器や植物の種子等の自然遺物が出土し、古墳時代(前期)と奈良・平安時代の遺物も含めると、整理箱200

箱ほどが出土した。

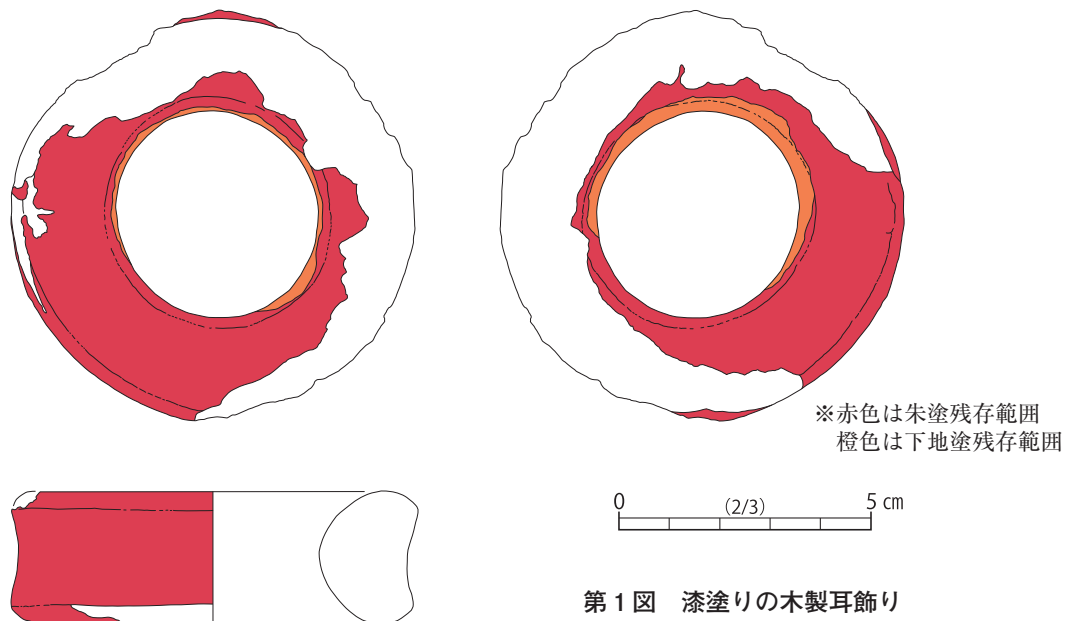
本遺跡は、成田層と呼ばれる砂層の上に堆積した土層中に形成されている。標高8m~7.5mの部分は、近年まで水田として利用されており、グライ化した土壌が堆積している。その下位には細粒の砂質土やシルト質土を含む草本質泥炭層があり、標高6m~4.6mの範囲で堆積していた。草本質泥炭層からは、古墳時代前期の土師器とともに、鋤や製作途中の鍬などの木製品が出土した。

草本質泥炭層の下位には、1mほどの厚さ(標高4.8m~3.5m)で、自然木や木片、植物の種子等を多量に混入する木本質泥炭層が堆積しており、縄文時代後・晩期の遺物を包含する。漆塗りの木製耳飾り(第1図)は、調査区南東寄りの木本質泥炭層から出土した。

出土直後は赤みがかかった橙色を呈し、プラスチックのような光沢を放っていた。変色と乾燥を防ぐためにキムテックで覆い、水を満たしたビニール袋に入れて密閉した上で取り上げを行った。外径8.0cm・内径4.0cm・高さ2.6cmで、耳飾りとしては大型である。

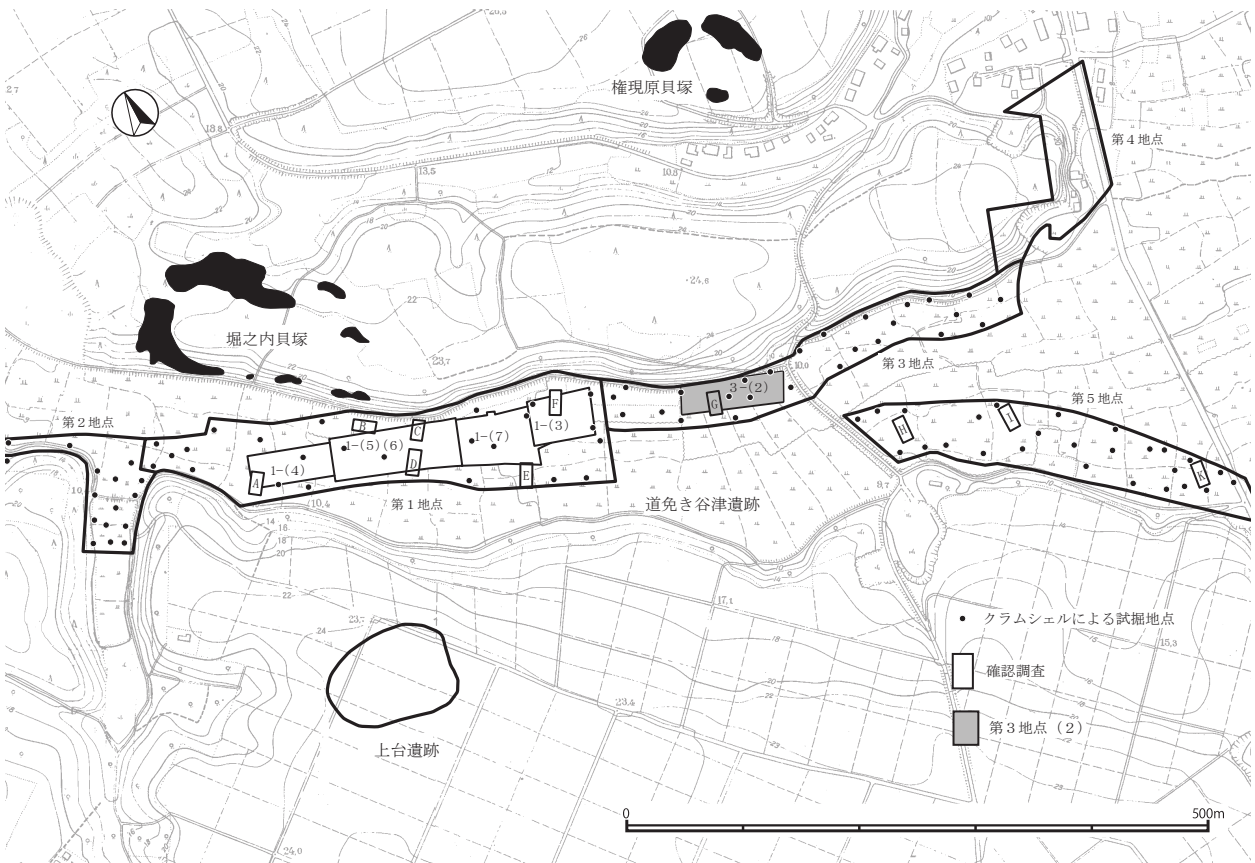
参考文献

松尾昌彦ほか 1994『縄文時代以降の松戸の海と森の復元』
松戸市立博物館調査報告書2





第2図 道免き谷津遺跡と周辺の遺跡



第3図 道免き谷津遺跡の調査地点